

パンゲランゴ

今立源太良

1

プリアンガンとは御霊の国の謂らしい。西ジャワ山岳地帯を擁し、その西北隅に Pangerango 峰がある。全山原生林に被われ、特異な高山植物の存在でつとに名高い。学者の寵をえて、早くも明治25年にその一部が、大正14年には全山保護区域に指定されている。集積された資料記録も少なからず、熱帯圏の中ではよく調べられた山のひとつに数え込まれている。

そうした記録を、二つ、三つと覗いてみて、私は登ってみたいと思った。それに熱帯アジアでの土壌動物の研究は、特に基礎の段階で、手ひどく立遅れている。少しでも他の領域の水準に近寄るには、足場、手懸りになる記録が多い地域を出発点にしたらよからう。いわんや Pangerango は残された業績の豊富さに加えて、標高 3,022m。縦にも横にも要領よく利用できるのではないか、という慾もあった。当然、昨年ジャワ島調査旅行(本誌4巻1号111~118頁参照)に区切りがついたところで、私は、ひとり別れて、この山を目指すことになる。

2

8月19日早朝、車はジャカルタから南へ、バンドンへの街道をたどる。ブンチャ峠を越すと、チパナスの村である。ここから、西へ登ってゆくと、海拔 1,400 m の山腹に、チボダス植物園がある。これは、ボゴールの分園で、園の中央まで、車が入る。

ここまではちゃんとした原生林らしいものはほとんどない。手ひどく森が伐られ、ひらかれて、田畑が続いている。

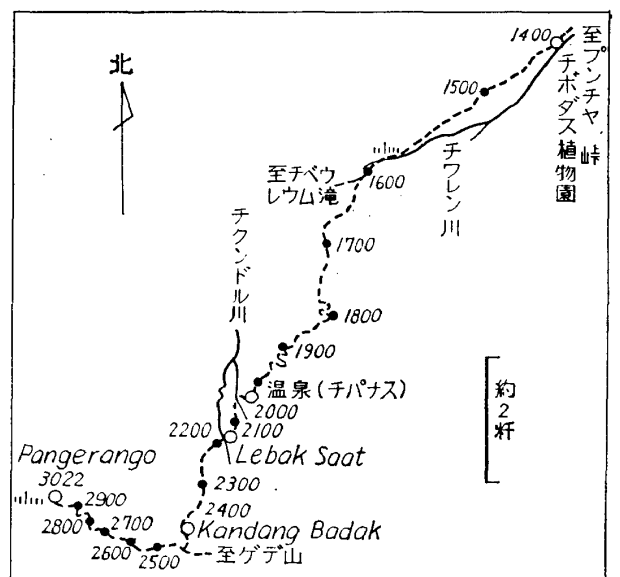
園の背後から保護区域が始まる。分園責任者 Nengah Wirawan 氏の配慮で、3人の随行者が選ば

れた。植物園在勤28年、45才の Noerta 老。一見したところ、吉井先生よりは15は年長といった感じの篤実、博識の士である。草木の指南役として、荷持の Tjarwa, Suhendra 両君の指導にも心を配っておられた。Nengah 氏が、「外人は規定額以上の心付を出すので、私共の研究上の使用に支障を来す」といわれたので、「下山の後、同氏立会の下に一切の支払いをしたい」と申し出たところ、氏はこれを煩わしとせず、むしろ歓迎された。お蔭で私は山の中では、専ら自分のことだけに打込むことができた。

6時15分、植物園を出て森に入る。熱帯降雨林の典型と申すべき、見事な原生林である。道も手入よく、大台ヶ原の緩やかな登り道をたどっている感じ。樹名を表示する札もかなり整っているが、何分いずれも樹冠高く、見上げて黒緑の重り合いが眺められるばかりである。行くこと30分余、どんぐりが目につくようになる。Noerta 老によれば *Quercus pallida* の実であるという。流れに沿うこのあたりでは、路上にうろうろする虫が目障りになる。マダラチョウ、ジャノメチョウの類の魯鈍な行動を示す蝶が多いせいであろう。もっともこれは日が昇り切ったからのことで、早朝には出てこない。

7時10分、森が切れて Pangerango の頂を望む。

私はここまで来て初めてその頂を見た。すぐに再び暗い降雨林に入る。*Schima noronhae* の白い花弁と *Castanopsis javanicus* の毬が、どんぐりに混り始め



パンゲラゴ付近概念図

る。上は暗く、オオタニワタリや *Zingiberaceae* などが、樹幹の列のところどころに変化をつけているばかり、しかも上り勾配とあっては、路傍のものしか、印象に残らなくなる。ツリフネソウやヒヨドリバナの白や斑入の花と共に、すみれがおびただしい。Noerta 老は *Viola serpens* という種だと教える。氏は中井猛之進先生の薫陶を受けた由で、この地の植物に関する造詣が深い。私より1年半ほど前にこの地に来られた黒川道博士が、今もなお「あのなんでも知っている」という註付で、氏のことを話されるのを聞くと、かすかな木れ日の中で、倦むことなく、じゅんじゅんと説き語った Noerta 老を思い出す。C. javanicus の幹を指しながら、この種についての相当に長い講釈を承ったが、今私の手控えを見直してみると「円尻扁平の栗、1,700~2,000m」としか記していない。Quercus や Schima は2,200m あたりまで分布し、周年、花や実が見られるという。雨量には季節変化があるが、気温は大略一定である。Schima にしても、乾季の今は、少し花が小さくなるだけのことらしい。黒川博士からの伝聞によると、チボダス植物園で、3月、琉球つつじが咲いていたので、きいたら年中こうですよといわれた由。私も本館前で花も実もつぼみも揃ったマンリョウを見た。幸にしてソメイヨシノには花らしいものが全くなかったが、かように専門家に質問する場合はいいとしても、普通ものをきく時に、気になって仕方がないのは、言葉の裏打になっている心の文化史を知らぬことである。ゆかしい伝承の香りを、嗅ぎ分けて、記録を採ることなど、思いもよらぬ。Rafflesia についての、えたいの知れぬ聞取書など、事実と語りが交錯しているようで、私にはどうしようもない。

8時30分、標高2,000mに近付き、Pandans を見なくなる。ヘゴの類は山頂近くまで多く、このあたりから梢のサルオガセが目立ってくる。もちろん、樹幹は例外なく苔に被われている。再び木立が切れ、明るい日の光の下に、展望が開ける。山頂が近付いてくる。斜面に温泉の湧口が並び、湯煙と共に路を越え、滝となって流れ下っている。45~48°C。周囲に喬木がないのは、これのせいかもしれぬ。ここもチバナスという。湯本、湯元の類であろう。ほどなく森に入って30分、さいの河原のような所に出る。Lebak Saat という。ここでもチョウが目立つ。9時30分、屈曲の多い登り道が続くようになり、巨木が減り、明るい林に変

ってゆく。梢にはサルオガセがなびき、シャクナゲ、シラタマノキ、コケモモの類が目につき始める。

標高2,400m。Kandang Badak には10時到着。マンリョウの一種 *Ardisia javanica* が道から少し入ったところで見つかる。丈4mばかり。つぼみも花も実もある。この地のマンリョウの類の巨大なのは、ポゴールでさんざん見てきたので、この程度の大きさでは、当然という気になってしまう。

Kandang Badak は少しくぎりひらかれていて、植物園管理の山小屋がある。平素は無人で、気象観測は久しく中絶したまらしい。建物はかなりしっかりして、20人位は楽に収容できそうである。ここからも山頂が望める。このように開けたところでは、飛びまわる虫が目立つこと、Lebak Saat と同様。アゲハやシジミチョウの動きを目で追っていると、森に近寄ると樹冠に触れんばかりにたゆたい、その上をゆく。生い茂った林内で、華やかな動物の姿に、触れぬのも当然である。

ここで、ゲデへの登山路と別れる。この火山は人気があって、乾季、特に8月には少なくとも50人は登るらしい。私の下山日が日曜に当たったので、かなりの登山客に会った。白人が多く、総数10名ばかり。ゲデへはちゃんとした道がついているが、Pangerango 側にはない。こんなところで裸の山に登る人の気持が判らぬが、先方も曲りくねった樹の下を這い登るのは、狂気の沙汰と思っているかもしれぬ。

山頂まで標高差600m余。90分で山頂に達したが、弥山の聖宝八丁を、多少意地悪にした程度である。這うことが多いお蔭で、かの高名のサクラソウ *Primula imperialis* などすぐに気がつく。キンボウゲの一種 *Ranunculus difusus* の黄花、*Dendrobium kuhlii* の紅紫の花も印象に残った。多少とも樹冠が疎になっていると、*Carex* が目についたが、この登りにかかってから、再び林内は暗くなって、写真が撮りにくくなった。

木の葉越しに、ゲデの山頂が下になったのに気が付き、ぶざまな這い登りに飽きた頃、急に地衣をまとった梢が、青空に浮いて見えた。登りの終点である。日本なら岩に小さくしがみついているハハコグサが、1m以上の株になって、そこここと、木立の欠けた部分を、占領している。結実期で、花はひとつもない。旧火口の草原に達する。その大部分はチゴザサ *Isachne*

であると Noerta 老はいう。一部火災の跡が認められるので、きくと、昭和31年に焼けた由。廃絶して20余年になる気象観測小屋は、もはや建物の態をなしていないが、そこに坐り込んで、手近なところで、目立つ植物を集めてみた。ハハコグサ *Anaphalis javanica* の他には、ヨモギ、コケモモ、シラタマノキ、カナメモチ、オトギリソウ、イチゴなど。黄花で、爪のような葉の *Oenothera*、卵型の厚い葉をもった *Rapanea* も、私の手控の中に挟み込まれて、残っている。

この山頂では、平均気温 9°C、周年ほとんど変化せず、年降水量は 3,300mm 内外。チボダスに等しく、Kandang Badak より 500mm 程少ない。多年性の *Anaphalis* が、50cm ばかりに成長するのに数10年を要するという。大きいのは、ハハコグサばかりではない。例えば *Vaccinium laurifolium* の葉の長径 5 cm 以上、*Photinia noboriana* では 13cm 以上ある。

上に挙げてきたような高山植物の存在は、熱帯島嶼としては、例外の現象らしい。あの Wallace 先生でさえ、文久元年、この山に登った記録では、動物のことは忘れて、専ら植物に饒舌を振っておられる。私が不慣れた草木名を書立てているのも、Noerta 師範の存在もさることながら、誰にも、そのような異常を誘発するだけの力を、この山が持っているからである。

3

ここで観察することと、写真を撮るのを打止にして、資料採りを始めた。両日を費した下山の途上、標高差200m毎に、1.5 l、4点ずつ土を掘取る。これは手持の器具と、残る滞在日数から割出した最大可能処理量に、ほぼ等しい。

この土から出た動物数は、1万を少し超える。土の量からいうと、あまり多くはない。同じ処理法によった北タイの山のものに較べれば、かなり少ない。この地域での採集品であるから、いわゆる新種が相当数出ているのは、しごく当然のことである。しかし、植物にみられるような多彩さ、豊かさは、なかったといってもよいかと思う。もっとも、黒川博士の地衣類調査(昭和39年3月)でも同様の結果が出た由で、しかも地衣相の標高に伴う推移と、土壤動物のそれとが、かなりよく似ているのは、面白い。

この山での、土壤動物群の構成を、標高を追って、比べてみると、種数も個体数も豊富な1,800~2,000m

までの地帯と、逆に真に貧弱な2,400~2,600m以上の地帯とが目立った対照を示している。前者は明らかに熱帯降雨林に対応するもので、同一方法を用いた私のタイ、マラヤ、ボルネオの降雨林での結果と、質、量共によく似ている。ここでは、南の土壤動物の代表とみなしうる主だった目や亜目は、一通り揃っている。温泉の少し下が限界に当り、引続いて遷移層に入るものと思われる。小型のマルトビムシの一群 *Megalothorax* がここでは多い。2,400m以上ではミミズの類が優勢で、節足動物は目立って貧弱であった。この層は見かけ上、高山植物を含む山岳林帯に対応しているが、ネパール、タイ、日本などでの結果からみると、かなりの不毛地域に等しく、常緑の森に被われたところとは思えない。

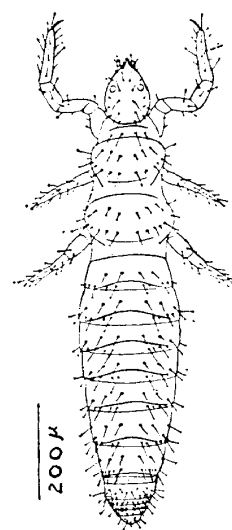


図1 東南アジアの Protura (原尾目) の1種 *Acerentulus phrachedee* IMADATÉ

私が特に興味を持っている Protura という小さな節足動物は、この山では熱帯降雨林帯からしか見出されなかった。この動物は、現在までに、アジア各地から約100種、内、熱帯圏からは、タイ、マラヤ、ボルネオを中心に40種ばかりが、知られている。今度の Pangerango の土の中からは、8種が発見されたが、特にこの山ないしはジャワの特異性を強調するに足る種は、含まれていない。この内2種類は、温帯アジアにまでひろく分布しているもので、残る6種の中に、未知種が2つある。しかし、これはジャワ島内の他の地点でも採集しているし、タイ、マレーからよく似

た種が記録されているので、特に注目すべきものでもない。熱帯アジア固有と考えられるのは次の4種。*Acerentulus phrachedee* はベトナム、タイ、マラヤの各地で、*Gracilentulus malaysiensis* はベトナム、マラヤ、ボルネオの低地で、かなり普通に見出されている。*Eosentomon gimangi* はボルネオから記載された種で、これもやはり熱帯降雨林のものである。*Silvestridia hutan* はボルネオの低地林で発見された

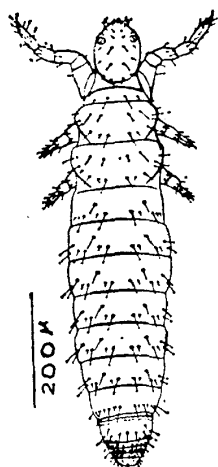


図2 *Silvestridia hutan* IMADATÉ

種であるが、今度の旅ではこの山の他、Lawu 山の中腹や Dieng といった1,700~2,000mの高所でだけ見出された。このように、マレー、ボルネオ低地に多いものが、ジャワでは低いところにいなくて、高地だけで見つかっているのは、そうした種が人間の攪乱に弱いということなのかもしれない。日本の Protura の中でも、手ひどく伐りひらかれた後も、相変らず生残ってゆくものと、さっさと姿を消すものがある。*Eosentomon sakura* といったような種が、遅い方

の、*E. asahi* などが弱い方の代表種と考えられる。

だいたい、私の仕事なるものは、手短かにいうと、現地では土を掘って、担いでくるだけのことである。その中に、何が、どれだけいるかは、何か月も先になって、やっと判る。だから、帰り道が、他の人よりは、余計に楽しい、ともいえる。うるさい位の鳥のさえずりの中を、採集品の出国法について、いろいろと思案しながら、かなり満ち足りて、私は山を下った。

チボダスに戻ると、大柄なアメリカ娘が、ジャカルタの親の宿所に帰るんだと、だだをこねていた。Nengah 氏の意向を察し、下山後2時間ばかりで、この17才の乙女と二人で植物園を出た。臨検に会う。この女性は、あまり現地の言葉が判らぬらしい。発育のいい白人娘と、ただでさえ小さい私との道行である。検閲意慾をそそるに十分だったらしい。

二度、三度と旅券を出して見せねばならぬ多少うとうとうしい経験を経て、御霊の国 プリアンガンを脱する。峠をこえれば、目の下に、夕もやに包まれた村や町が、のどかに拡がっていた。

追記：本稿は、京大吉井教授・東海大学酒井講師によるインドネシア地域研究の予備調査に随行した記録の一部である。両氏は、既に本誌3巻5号、110~121および4巻1号、111~118に、それぞれ報告を発表しておられる。Pangerango 山の地図は、手帳に残しておいた記録と記憶とから構成したので、必ずしも正確ではない。また、本文の中の図は拙稿 Nature & Life in SE Asia, 4: 195~302 (1965) から採った。草木名は、すべて、京大荻野和彦助手の校閲を経た。記して、謝意を表す。